

翻訳一口メモ

その 28

日本語の数詞

日本語を学んでいる外国人がどうしても覚えきれない日本語として数詞があるという。日本人と結婚し日本に長年にわたり住んでいるイギリス人（かつて私の英語教師の一人であった）は、これはどうしても覚えきれないので、「一つ、二つ、三つ・・・」ですましていと語っていた。そうはいつでも、当の日本人でもこの数詞の使い分けは非常にややこしい。日本語を母国語とする日本人にもむずかしいのだから、外国人となればその難しさとややこしさはこちらの想像を超えたものであるに違いない。

そこで今回は、ものによってどういうふうな数詞が使われているかをざっと列記してみることにした。

☆☆☆☆☆ 日本語の数詞 ☆☆☆☆☆

動物・植物：

植木	株（かぶ）、鉢（はち）、本	動物	頭（比較的大きいもの）
うさぎ	羽（わ）、匹	動物	匹（比較的小さいもの）
木	本、株	鳥	羽
木の葉	葉（よう）、枚	花	本、輪（りん）
草・竹	本	ペンギン	羽
くじら	頭	ぼんさい	鉢
だちょう	羽		

飲食物：

いか・たこ	杯	だんご	くし、本
魚	匹（ひき）、本	豆腐	丁（ちょう）
魚（料理）	匹、尾（び）	のり	枚
折り詰め	折り	のり（十枚）	帖（じょう）
ざるそば	枚	ピザ	枚
散薬	包（ほう）	麺類	たま
錠薬	錠	麺類	把（わ）〔乾麺〕
食事	膳、杯、口、食（しょく）	麺類	杯（器に盛ったもの）
吸い物	わん	ようかん	本

乗り物：

貨車	両、台	船	隻、艘（そう）、艇（てい）
航空機	機	列車	両、本
自動車	台、両		

道具・機器類：

アイロン	丁	茶器	席、組み
印刷機	台	銚子（ちょうし）	本
うちわ	本	ちょうちん	張り
鉛筆	本	ちり紙	締め、枚
鏡	面	机・いす	脚（きゃく）
額	面、架（か）＝たな&台	つぼ	口、個
掛け軸	幅、軸	砥石	丁
傘	本、張り	はさみ	丁、梃
かみそり	丁	はし	膳、そろい
カメラ	台	旗	本
くし	本	半紙	枚、帖、締め、束
コップ	個	ピアノ	台
重箱	重ね	笛	本、管
すずり（硯）	面	筆	本
すずり箱	箱	ふとん	枚、組、重ね
すだれ	張り	包丁	丁、梃
墨	丁、梃（ちょう）	万年筆	本
そろばん	丁	モーター	基（き）
たんす	棹（さお）	ワープロ	台

服飾品：

糸	本、巻	ズボン	本
エプロン	枚	スリッパ	足（そく）
オーバー	着	足袋・下駄	足
帯	本、条	靴	足
織物	反（たん）	手袋	足、揃い、組み
シャツ	着	ネクタイ	本
スーツ	着、組み、揃い	綿	枚、包み
スカート	着		

土地・建造物：

家	戸 (こ)、軒、棟	建具	本、枚、面
倉	棟	寺	寺、宇、堂
材木	木 (ぼく)、本	戸	枚
神社	座、社	土地 (登記)	筆
石材	個	長屋	棟
石塔	基	屏風	架、帳、双
田	面、枚	襖 (ふすま)	領、枚
畳	枚、畳		

文化：

映画	本	短歌	首
演芸	席、番	トランプ	組み
議案	件	ノート	冊
碁・将棋	極、番	俳句・川柳	句
詩	編	文章	編、文、章
事件	件	巻物	軸、巻
写真	枚、葉	履歴書	通
小説	編、巻	レコード	枚
書籍	冊、巻、部、帙 (ちつ=書物)	論文	編、篇
新聞	部、枚	コピー	部、通、枚

神仏・遺骨：

遺骨 (体)	体	塔婆 (とうば)	基、層 (そう)
位牌	柱	仏像	軀 (く)、体
数珠	具		

では、英語に数詞にあたるものがまったくないかというところでもない。特に「群れ」の使い分けはややこしい。以下にその使い分けの例を示す。

- (1) a school of little fish
- (2) a pride of lions
- (3) a murder of crows
- (4) a gang of buffaloes
- (5) a band of Gorillas
- (6) a colony of ants
- (7) a pack of wolves

(8) a pod of whales

(9) a school of dolphins

(10) a flock of sheep

(11) a herd of cattle (dairy cattle, deer, domestic animals, elephants, pigs, horses, camels, children)

このように英語では、動物、魚、鳥、虫などの種類に応じて「群れ」の表現がはっきりと定義されているようだ。我々日本人にとっては「群れ」の一言ですむのが、英語になるとこのように使い分けられていることからすれば、「たで食う虫も好きずき」「所変われば品変わる」のことわざに見られるように、文化や国民性により表現の仕方が変わるということになるのか。

他の数詞に相当する英語（不可算名詞の量）：

a bar of chocolate, a bar of soap, a blade of grass, a block of ice, a sudden burst of applause;

a cake of soap, a crowd of people, a clove of garlic (bulb), a cube of sugar, a cut of meat;

a dose of medicine;

a fit of anger, a flock of sheep;

a herd of cattle (dairy cattle, deer);

a loaf of bread, a lump of clay, a lump of sugar;

a mountain of work;

a piece of baggage, a piece of bread, a piece of candy, a piece of chalk, a piece of furniture, a piece of information, a piece of land, a piece of news, a pile of rubbish;

a ray of sunshine;

a sheet of paper, a slice of bread, a speck of dust, a spoonful of sugar; 等々。

蛇足：

虫が出たついでに話は脱線するが、精神分析学の創始者であるフロイトは、人間を無意識のうちに動かしている衝動をリビドー (libido) と名付け、その心理学は二十世紀最大の業績の一つに数えられているようである。その一方で、日本人は人間が意識されない何物かよってつき動かされていたことに早くから気づいていた。「虫」という言葉がそれだ。この虫は、「人間の体内にいて、身体や感情などにさまざまな影響を与えると考えられるもの」と定義されており、「腹の虫がおさまらない」「虫がいい」「虫が好かない」「虫ずが走る」「虫の知らせ」「虫の居所が悪い」「飛んで火に入る夏の虫」「虫が付く」「虫を殺す」「虫も殺さない」「虫の息」「本の虫」「弱虫」「泣き虫」「仕事の虫」「芸の虫」等々と、いろいろな表現に用いられている。こんなふうには日本人は、フロイトが見いだす前に、無意識に人間を

左右する得体の知れぬ何ものかを直観力で感じとり「虫」と表現していたのであるから、すごいとしかいいようがない。リビドーとは？なんて言われるとえらく小難しいことのように思えるが、それはさっきいったような日本語の「虫」に相当するものだと説明されれば、なるほどそういうことかと合点がゆくのではないだろうか。

以上、これにて 28 回目終わり。